

最初にこの会(国語問題協議会)でお話をいたしましたのが「小学校における漢字教育」という題で、たしか昭和 32 年だったと思います。もう 20 年以上の月日が流れております。本日は「生涯教育としての国語教育」ということでお話申し上げたいと思います。

言葉を知らなければ意識にならない

1930 年代以降、「チンパンジーに言葉を教える」という実験が多くの学者によってなされております。有名なものにケログ夫妻、ヘイズ夫妻などの実験報告があります。これらは、人間の赤ちゃんと一緒にチンパンジーを育てて、我が子と全く同じ扱いをして、言葉をその間に教えて行こうというものです。これらの報告によれば、皆一様に生後一年半ぐらいまではチンパンジーの方が賢いそうであります。ところが、一歳半頃になりますと、人間の子どもは言葉をどんどん覚えて使うようになります。そうすると、たちまちに人間の赤ちゃんの方が賢くなるということです。そしてチンパンジーの方は、人間の赤ちゃんと同じように言葉を教えても一向に言葉を覚えて使えるようにならない。こういうことを報告しています。

この実験でわかりますことは、言葉を覚えて使うことができるのは人間だけである。人間に次いで知能が高いと言われるチンパンジー

でさえ言葉を覚えることが出来ない、ということです。これは裏返しますと、人間は言葉を覚えることによって真の意味での人間になる。真の意味の人間になるということは言葉の習得によって初めて可能なものである、ということがわかるわけであります。

この言葉の重要性を証明するものに、蝶の観察に関する実験があります。蝶の標本の中から一匹の蝶、例えば黄色い羽に黒い縞のある蝶を取り出して子どもに観察させて、数時間後これを元の箱に戻し、先ほど見た蝶がこの中のどれであるかを当てさせます。この実験で正しく言い当てられる子どもは、必ず、“黄色”という言葉を知っており、“縞”という言葉を知っている子どもに限られる、こういう実験です。つまり言葉を知らない子どもには見た蝶の特徴を記憶して、これを正確に言い当てることが出来ない、というわけであります。このことは、明らかに、私どもは言葉で物を見ている、ということを証明しています。黄色い色を見てこれを黄色だと意識するためには、黄色という言葉が必要であって、黄色という言葉が知らなければ、色が目に入ってもそれがはっきりとした意識にはならないのです。だから、記憶にはならないわけで、そのために正しく言い当てることが出来ないのです。

このように、人間は、言葉を覚え、その言葉によって経験を真に経験たらしめ、その経験を知識として成長して行くわけであります。